特集・事故率低下のための種豚導入術

導入雄豚の育成方法

㈹富士農場サービス 代表理事　桑原　康

はじめに

種豚導入は日本の養豚の発祥以来、永遠に続いてきましたが、その時代によって、遠隔地導入や農場指定、疾病の浸潤、導入季節など数々の問題が提起されてきました。また外部導入か自家更新かの賛否も加わり、その農場、その人の手法もさまざまです。導入隔離ひとつを見ても、場外の完全隔離農場での一～三カ月の着地検疫や同一敷地内の別棟隔離、同一豚舎内の馴致検疫など、各農場レベルによりその方法は多様です。

本稿では雄豚を中心に、導入種豚の育成方法について考えてみます。

種雌豚導入の基本的な考え方

雌豚は四～五カ月齢の七〇～一〇〇kgで導入し、各農場のプログラムに合った手法で馴致され、八～八・五カ月齢の一四〇～一五〇kgで種付けをしたいところです。その際の背脂肪は一八～二〇㎜は必要です。

若雌は妊娠しながらも発育し、分娩後に背脂肪を附着することは困難ですから、分娩時の背脂肪は二五㎜以上が必要です。それによって次の種付けも順調に行えるのです。ただし品種系統により、二～三割の上限は問題ありません。

導入若雌は農場外隔離検疫舎か、同農場同敷地内の馴致施設において、淘汰するような母豚と同居させることが馴致となります。

導入雌の飼料はビタミン、ミネラル分の多い種豚用でよいのですが、脂薄系などといった種豚のタイプによっては、肉豚用を長期給餌させ、背脂肪を含めた体積をつくることが重要となります。

また、雌も導入ストレスにより食下量が下がるため、事前に給与飼料を減量しておくと導入ストレスが軽減されます。

種雄豚導入の基本的な考え方

種雄豚は特に経営に対する貢献度が高いことから、一一〇kgの検定成績を十分考慮しながら、各農場に合った数値、体型、資質の種豚を購入したいものです。

可能であれば、同腹豚の肉質が調査済みで能力の高い種豚を購入することが望まれます。

導入先の衛生条件の確認や、生涯能力の高い長命性の育種素材を求める必要もあります。

今、海外においても雄の最大の課題はサウンドネス、特に後肢です。

(1)雄の導入

ある海外ブリーダーを訪問すると生産販売豚は全頭検定を実

施しています。すばらしい育種体制です。国を上げての意識向上の証もあり、その意気込みを感じることができます。検定を終了した肉豚体重段階の雄を見ることによって、その産子を推測することができます。

雄豚の一一〇～一二〇kg検定終了豚を導入後、検定用飼料や肉豚仕上げ飼料から種豚用飼料に切り替えます。

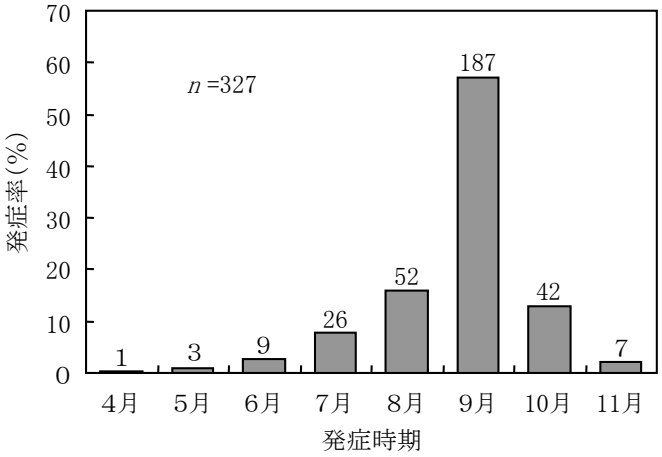

図1　年間の精液異常の発生頻度

⑵衛生レベルの確認

導入前の事前聞き取りと血液検査により、万が一の対処とワクチンプログラムへの工夫ができます。

⑶特に夏季の導入に注意

移動ストレス、日射病、熱射病、いれ込みなどによる飼料の食い止まりには体温測定が基本となります。基本的体温測定（三八・五℃）を実施しなければ何もはじまりません。

一方、出荷者にとっては種豚出荷直前は飼料の給与制限で空腹の状態にすることが重要になります。

長距離輸送は夜間または朝、夕に実施し、出発前後は水道水にて散水を必ず実施します。

一、〇〇〇kmの長距離輸送でも、製氷店の五〇～一〇〇kgの氷塊を利用すれば、日中の車内でも豚はスヤスヤと仮眠状態を保つことができます。

⑷特に夏バテの対処

夏には各種要因が重複します。まず、精液異常症候群（**図1**）です。夏にはたった一日微熱があったとしても無精子になることが多々見られます。（冬の発熱で無精子になることは皆無です）。それだけ季節要因が大きいのです。

食欲増進には**表1**に示した事項を応用してください。

⑸複数導入の時は単頭飼育に

種豚生産者サイドにおいて、二～三頭の複数飼育の場合でも、購入農場が一二〇kg以上での導入になった場合、単頭飼育にしないとお互いに乗駕し合ってしまいます。

また、若雄は豚房が変わると雄性本能を発揮して、お互いをつぶし合う可能性があるので一頭飼育にします。

⑹雄の使用開始

八～八・五カ月齢になり、雄としてのいれ込みや、乗駕欲の強い個体は徐々に試乗してもかまいません。特に移動後の興奮時は乗駕欲が強いので、この時期に使用してあげないと雄としての時期を失う可能性もあります。

⑺導入豚房

導入雄は肢蹄も損傷しやすい

表1　夏季の食欲増進のヒント

①嗜好性のよい子豚の飼料給餌
②食べやすい粘り餌
③好んで食べる山林の腐植土
④豚はマヨネーズ味が大好き
⑤ビタミンB_{12}の注射

ため、飼育床にオガ粉を十分に敷きつめて、加湿をしてあげることが大切です。

⑻隔離豚舎の様子

富士農場サービスでは導入隔離農場を三農場保有しています。

①由比農場は周辺直線で一四km圏内に養豚場はなく、独立して存在しています。

②佐野農場（**写真1**）はフェンスで囲われており、外部動物の侵入もなく、特定管理者のみが入場できます。周辺も山林で囲まれています。

写真1　佐野農場隔離豚舎

おわりに

日本の養豚が存続するためには、養豚経営の各種要因を考慮しながら、収益性につながる手法が、どこまで考えられるか多くの視点を持ち、取り組まなければなりません。種雄豚の能力、環境、飼料、疾病、人材など、日本の養豚の底力をどこまで発揮できるのかは、関係者の相乗効果によって決定されると思われます。